

〈博士論文要旨〉

中世墓の変遷と火葬の受容

狭 川 真 一*

本論では、日本の中世における墳墓の成立と変遷について論じ、かさねて中世に顕著となる火葬の受容について論じるものである。

1. 中世墓の成立と変遷

奈良時代から平安時代にかけて、連綿とその変遷を追跡できるのは大宰府である。そこでの変遷を整理すると、奈良時代には律令の規定に制約された墳墓が都市の周辺部分に展開する。これらは火葬墓であり墳墓の規模としては小さいが、その墓域は広く、また単独で存在する傾向にある。これは平城京に類例を見出すところであり、「喪葬令」皇都条の効力を知らされるが、平城京では都の移転とともにその系譜は絶たれるが、大宰府ではそのまま同じ丘陵部に造営を続けてゆく。しかし、葬法は火葬から土葬へと回帰し、9世紀中頃を過ぎると複数の墳墓が群をなし、徐々に丘陵斜面から裾部分へと造営場所を移し、最終的には都市内に造営される。

大宰府の場合、都市内の造営が始まるのは11世紀前半からであるが、12世紀後半から13世紀にかけてその量が増加してくる。それらの遺構は、単独もしくは2基程度で存在しており、西日本に多く検出例のある屋敷墓の造営手法に類似する。おそらく屋敷墓造営階層と同等の社会的位置を有する人々が、大宰府に生活していたことを知るのである。このことは、輸入陶磁器の椀と在地産土師器の杯・小皿のセットで何らかの供物を供献するという共通する葬送作法にみられるところである。また類似の行為は、凡西日本的に認められるものでもあり、屋敷墓造営階層にこうした葬送作法を広げた宗教者の存在を想定することができる。

鎌倉時代に入ると群集する火葬墓を中心とする墓地が各地に出現し、これまでの墳墓の在り方を一新する。丘陵部に方形の石囲いを連結する形で墓地造営を行うが、こうした群集墓は屋敷墓造営階層が発展し、群集する墓地造営へと移行するなかで、一族墓の様相を強めたものと考えられる。

墳墓の構造も変化しており、当初は方形のしっかりした石囲墓を接続したものが主体で、埋葬遺構も蔵骨器を埋納するものが多く見られたが、後半期にはいると石囲いは形を崩し、最初から複数の埋葬を予定して長めの長方形に構築するようになる。また、15世紀頃からは墳墓の上部に小形の石塔（多くは組合式の五輪塔）を標識として配置するようになるが、畿内では16世紀前半頃には一石五輪塔や小石仏へと変化するほか、量的に拡大する傾向が見えており、造営者の低層化を読み取ることができる。さらにこの時期には、石塔の下部に埋葬遺構を持たないか、あるいは

平成20年度 *文学研究科文化財史科学専攻

はごく少量の埋骨を行う程度に変化してくる。骨の扱い方、石塔の意味づけが大きく変化してきたことが理解でき、近世的な墓塔・墓標を主体とする墓地への胎動期とみなされる。

中世に成立する火葬墓を主体とする群集墓は、その廃絶が一様に16世紀代という同時期に集中していることから、早くに指摘のあった在地領主制の崩壊に伴う廃絶という考えを追認することになるだろう。ただし、領主制自体が単純なものではなく、各時代において墓に埋葬される人物は、その領主を主体としながらも終盤にはかなり広範囲にまで達していたとみられ、支配下にある庶民層までも含み込んでいた可能性が考えられる。しかし、その廃絶を同じくしていることは、墓地を造営し得た庶民層も未だ自立した民衆とはなっておらず、領主の盛衰に翻弄される程度の存在にしか過ぎなかったことが理解できる。

2. 火葬の受容と展開

いわゆる遺体を火化するという行為は、すでに縄文時代から類例は知られているが、火化後に骨を拾い、蔵骨器に納め、さらに土中に埋納するという一連の作法を有する火化行為を火葬と呼ぶならば、やはり奈良時代に入ってからということになる。

奈良時代における火葬は700年の僧道昭に始まるとされるが、考古資料からも概ねその前後に始まっていることが理解できる。ただその浸透となると、持統天皇の火葬が大きな影響を与えたようであり、他の皇族や貴族に受容されはじめ、さらに地方にも広がりを見せ、郡司層を中心に受容される。それが律令官人である証でもあったためか、8世紀後半には東西日本の広い範囲で受容されるが、逆に平安時代に入ると急速に姿を消すこともそのことを物語っている。

さて、火葬は中世に再び流行を迎えるが、その背景には舎利信仰と山上他界観による霊場への納骨信仰がある。高野山への納骨は12世紀中頃には成立しているようであるが、各地での幅広い受容は、12世紀後半に増加する集団納骨施設への火葬骨納入に求めたい。死後も一族が同所に集う家親念の表れと考える。これは13～14世紀に至っても盛んに造営されており、納骨穴がある五輪塔の存在がその広がり物語る。

中世の近畿や九州における火葬墓の出現と展開をみると、13世紀中頃以降に石囲いの墳墓とともに出現し、16世紀代まで形を少しずつ変化させながら続く。もちろん土葬墓も存在しているが、この約300年間は火葬が安定的に受容された時代と言える。東日本では12世紀後半に遡る個人墓の造営が報告されており、課題を克服しなければならないが、個人を意識した墓の造営は13世紀に入ってから主流になることは東西で同じである。ただし、一族墓を形成する中での個人の強調であり、家の中の個人であることを忘れてはならない。

さらに、中世後期には火葬施設の存在が目立ってくる。中世前期以前の火葬遺構はほとんど知られていないのに対して、この時期は群集する形で丘陵部に多数造営されるようになってくる。恒常的に利用される火葬場の設営と理解できるが、この遺構の出現と先に示した一石五輪塔や小石仏の大量造営はほぼ時期を同じくしており、五輪塔や石仏に与えられた性質の変化と、火葬の受容拡大が呼応していることに気付く。費用がかかるとされる火葬もその受容層はかなり低層化していることも注意を要する。

中世の墓制を火葬という観点から眺めると、そこには中世人の他界観が明確に表現されている。舍利信仰から派生した骨への信仰と極楽往生を希求する人々の姿が、墓遺構を媒体として具体的に知ることができるようになった。その思想の多くは、大きく変化した現代社会の中にも深く根付いているのであり、その原点が中世に求められることを知るのである。